

OCT アトラス

吉村長久, 板谷正紀 著

京都大学眼科の吉村長久教授と板谷正紀准教授の執筆による OCT アトラスが発行された。光干渉断層計 optical coherence tomography (OCT) は 1997 年に眼底疾患の診断装置として国内に導入され、網膜の 3 次元構造を簡単に観察できる装置として急速に臨床の場に普及した。その後、ハード、ソフト両面での改良が大幅に進み、現時点での最新鋭の spectral-domain OCT では深さ分解能 5~7 μm が実現されている。

最新鋭の spectral-domain OCT による画像が多用されている本書では、まず OCT 読影の基礎として、細胞層が低反射、線維層や境界が高反射という原則、正常網脈絡膜の OCT 像の解説、スペckルノイズと加算平均による除去、アーチファクトなどの事項がわかりやすく解説されている。次いで、各論として、黄斑円孔・黄斑上膜など網膜硝子体界面病変、糖尿病網膜症、網膜血管病変、中心性漿液性脈絡網膜症、加齢黄斑変性、網膜変性症、ぶどう膜炎、病的近視、網膜剝離の各疾患が論じられている。疾患ごとにまず概要としてそれぞれの疾患メカニズム研究のこれまでの歴史が語られ、次いで最新の OCT 所見を基にした各疾患の発症機序が詳細に述べられている。そしてそれに続く 180 超の症例での OCT 像が本書の最大の見せ場である。各症例の病態が経時的に変化していく様子が OCT 像、眼底写真、造影写真を用いて詳細に示されている。そして、各疾患における典型例はもちろんのこと、バリエーション例も多数示されている。これらの症例をすべて読んでおけば、臨床で出合う上記疾患に

おけるほとんどのバリエーション症例を経験したのと同じだけの知識を身につけることができるであろう。

本書を読んだ印象としては美しい本だということである。こんなことをいうと不謹慎と言われそうであるが、普段、角膜などの前眼部疾患の患者を診察していて、眼底疾患の患者の診察をすることが少ない私などがこの本を読んでいると、その美しい写真や装丁を見て感心してしまい、つついこれら網膜硝子体疾患で悩んでいる患者さんのことを忘れてしまいそうである。しかし、美しく撮られた OCT 画像を詳細に検討することが、各種眼底疾患の発症メカニズムを解明することに発展し、個々の患者において正しい治療方針を導くことにつながる。このことがこれらの疾患で悩んでいる患者に大いに役立つことは明らかであろう。病気の図譜であるのにどうして美しいと感じるか考えると、spectral-domain OCT で撮られた画像が各種眼底疾患における立体的な変化を手取るように示しているからであり、これを見ることでそれぞれの疾患の成り立ちが理解できるからである。

網膜硝子体疾患を専門とする先生はもちろんのこと、他の subspeciality を持つ眼科医、開業医、研修医など多くの先生方に推薦したい。

東京大学大学院教授・眼科学 天野史郎

A4 頁 368 2012 年

定価 24,150 円 (本体 23,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01513-4] 医学書院刊